

「21世紀COEプログラム」(平成15年度採択)中間評価結果

| | | | |
|-------------------|--|-----------|-------|
| 機関名 | 神奈川県 | 拠点番号 | J23 |
| 申請分野 | 学際・複合・新領域 | | |
| 拠点プログラム名 (英訳名) | 人類文化研究のための非文字資料の体系化 Systematization of Nonwritten Cultural Materials for the Study of Human Societies | | |
| 研究分野及びキーワード | 〈研究分野:情報学〉 (社会情報システム) (歴史情報システム) (社会の防災力) (身体運動文化論) (地域間比較研究) | | |
| 専攻等名 | 歴史民俗資料学研究科歴史民俗資料学専攻、日本常民文化研究所、外国語学研究科中国言語文化専攻 | | |
| 事業推進担当者 | (拠点リーダー名) | 福田 アジオ 教授 | 他 20名 |

◇拠点形成の目的、必要性・重要性等：大学からの報告書(平成17年4月現在)を抜粋

| |
|--|
| <p><本拠点がカバーする学問分野について> 本事業の推進担当者は、文化人類学・民俗学・歴史学・建築史・情報環境工学・災害情報論を専門とする。他に共同研究員として地理学・博物館学・美術史の専門家の協力を得ている。これらの専門家の学際的協力によって、非文字資料の収集・整理・情報発信の方法の確立を目指して研究を推進している。</p> |
| <p><本拠点の目的> 社会・人文諸科学の研究対象は人類文化の総体であるが、従来、実際の分析対象は文字・文章で表現された事象に限定されがちであった。しかし、人間諸活動の表現形態は、文字・文章以外に、図像・身体技法・感性・環境など多様な形態をとっている。本拠点は、これらの事象を資料として定着させる方法を開発し、体系的に整理するとともに、その解析方法を開発し、その成果を世界に向けて発信する、非文字資料研究センターを目指す。</p> |
| <p><計画：当初目的に対する進捗状況等> 本拠点においては、当初2年間は、研究対象資料の所在調査および収集・整理、解析方法の確定、所蔵資料の活用方針の策定、情報発信の技法の開発に関する動向調査等、今後の拠点形成の展開の基礎となる事業の推進に重点を置いてきた。もちろん、すでに研究蓄積のある分野では、それをさらに発展させる研究も遂行し、その成果を公表してきた。その結果、図像・身体技法・感性・環境・景観のそれぞれについて集積すべき資料の確定、収集・整理、資料化の方法の確立という課題については、計画にしたがって順調に進捗している。情報発信についても、多少の遅れはあるが、モデルとなる地域の確定を終え、具体化の段階に確実に入りつつある。</p> |
| <p><本拠点の特色> 本拠点の特色は、非文字資料を中核とした人間諸活動の総体に関わる資料群を対象にし、それらの資料群の相互関係を体系的に捉える点にある。この事業は、人文・社会諸科学の学際的研究・調査を推進してきた日本常民文化研究所の長年の実績と資料学を専門とする全国唯一の歴史民俗資料学研究科を基礎としてはじめて展開できる。さらに、情報工学との結合によって、資料整備・情報発信の方法においても新しい方法を提示できる。</p> |
| <p><本拠点のCOEとしての重要性・発展性> 地球的規模で相互関係が展開している今日、異文化間の相互理解の促進が重要な意味を持つことはいままでもない。本拠点の事業の成果によって、人類文化の生活に密着した最も根底的なレベルで、自らの文化の理解を深めると同時に、国際的相互理解の可能性を飛躍的に高めることができる。非文字資料群の体系化は、特定の文字・言語に拘束されないが故に普遍性を有し、人類文化に等しく適用できる方法として世界に提供できる。</p> |
| <p><本プログラム終了後に期待される研究・教育の成果> 全般的成果の中心は、非文字資料の体系化に関わる普遍的方法論の提示である。個別적으로는、i『日本常民生活絵引』の英訳を基本としたマルチ言語版、ii『日本近世・近代生活絵引』、『東アジア生活絵引』、iii身体技法・環境・文化情報発信に関する研究成果報告書の刊行、iv図像・写真・民具などの資料及び文献に関するデータベースの作成と公開、v非文字資料の収集・整理・公開システムの開発、vi高度専門職学芸員養成システムについての提言書、vii海外研究機関・研究者ネットワークの形成、viiiPD、RAの研究成果論文の刊行、などである。</p> |
| <p><本拠点における学術的・社会的意義等> 近年、図像を中心とした非文字資料は、文化人類学・民俗学・歴史学などの分野で研究が推進されるようになってきたが、動作・感性・景観などを含めた資料群については、その体系化・活用法についての理論は未確立である。その意味で、非文字資料の収集・体系化を進めることは、学際的研究・文化比較の深化等学術的に重要な意味を持つ。また、収集・整理の成果は、人々の日常の生活記録として文化遺産の重要な一部となる。また、その成果の新技术の応用を含む展示・公開によって、人々に普通の生活の価値を再発見させ、自己認識を高めさせることができるばかりでなく、国際的相互理解の可能性を広げるという点でも大きな社会的意義を有する。</p> |

◇21世紀COEプログラム委員会における評価

| |
|--|
| <p>(総括評価) 当初目的を達成するには、助言等を考慮し、一層の努力が必要と判断される。</p> |
| <p>(コメント) 本研究教育拠点形成計画は、日本常民文化研究所の調査研究の蓄積を踏まえて、新たな構想の下に設置された歴史民俗資料学研究科の研究者養成の実績を基礎に、文字に表現されない人間諸活動の資料化とその体系化を行うことで、人類文化研究の新たな地平を開き世界的に貢献することを目的としている。 本プログラムは重要な課題に挑戦しており、個々の活動分野については顕著な進展が見られ、生活絵引の資料化や実験展示等にその成果が結実していて、評価できる。体系化は段階的になされるのは止むを得ないが、今後、各分野における資料の体系化から、プログラムとして当初期待した統合的な「体系化」へとさらに進展が見られることが期待される。 人材育成に関しては、その理念をより明確にして、社会的要請に応えられる博士の学位をより多く授与する努力が必要であると考えます。</p> |